

研究報告

リュック・フェラーリ《ほとんど何もない》  
作品群探究に向けて

A PROGRESS REPORT ON LUC FERRARI'S PRESQUE RIEN SERIES

佐藤亜矢子

Ayako SATO

東京藝術大学

Tokyo University of the Arts

概要

リュック・フェラーリが電子音響音楽、ドキュメンタリー映画、器楽とテープのミクスト作品という異なる3つの形態によって創作した《ほとんど何もない》7作品全体像の探求に向けての進捗報告を行う。本研究は、《ほとんど何もない》各作品の語法や特徴を確認した上で、本作品群の作意、フェラーリの創作活動における意義、《ほとんど何もない》である根拠・所以を探ることを目的としている。これまでに、自筆草稿に基づく作品分析や関連組織への訪問調査によって、緻密な創作過程や別名楽曲との相関、他芸術との接触が創作に齎した影響の可能性等を確認した。

Luc Ferrari has seven works entitled *Presque rien*: four electroacoustic pieces, two mixed works, and one documentary film. Drawing on musical analyses, suggestions obtained from interviews, and trips to relevant organizations, my study aims to explore the motives of the *Presque rien* series. In this paper, I would like to report on the progress of my research.

フェラーリがこれら7作品を計画的に創作し、《ほとんど何もない》作品群を築き上げる構想を持っていたと表明する根拠には乏しい。むしろその憶測に抗う見解の元、まずそれぞれを独立した作品として個々に分析し、それぞれの特徴を炙り出すことから、作品群全体像へのアプローチを試みたい。当初は共通項を引き出すことのみを目指し、それによって何らかの解答を導くことを画策したが、そうではなく個々の作品の独自性にこそ着目すべきであり、その相違が前提となり得る。本研究は、次元の異なる作品に何故同名を被せたのか、7作品がそれぞれの《ほとんど何もない》としてどのような核を有しているのかを考察し、フェラーリの変化に富んだ営為の中で本作品群を創作し続けたその作意や、創作活動全体における本作品群の価値を確認することを目的としている。本稿では、本研究の進捗状況として、2014、15年に実施した訪問調査の成果を報告する。尚、7作品のうち大凡の考察を済ませた《第一番》、《ほとんど何もないあるいは生きる欲望 第一部：コース・メジャン》については、過去の研究報告<sup>2</sup>を参照されたい。

1. ほとんど何もない作品群

リュック・フェラーリ Luc Ferrari (1929-2005) は1970年から2004年の間に発表した7作品に《ほとんど何もない *Presque rien*》の名を冠した(表1)。1作目である電子音響音楽作品《ほとんど何もない第一番あるいは海岸の夜明け》(以下《第一番》)に関しては特にフェラーリ自身多くを語りながらも、「『ほとんど何もない』の作曲家」になってしまうことを望んではいなかったという[1]。しかし、その後《ほとんど何もない》はフェラーリを象徴する確かな一語となった<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 2002年にジャクリヌ・コーによって著された、フェラーリのインタビューや「自伝」を掲載した書籍、2003年にコーによって

2. 訪問調査の成果報告

2014、15年夏、パリ近隣の関連組織やフランスでの音楽祭を訪問した。筆者にとって初渡仏であり、踏み込んだ調査にまでは至らなかったが、作品群探究に示唆を与えてくれる物事との邂逅に充実した滞在となった。

撮影されたドキュメンタリー映画、没後2006年に身近な人物らによって設立された協会、その協会主催の作曲コンペティション、これらも全て「ほとんど何もない」の名を持つ。

<sup>2</sup> 東京藝術大学に提出した修士論文「リュック・フェラーリ、逸脱する電子音響音楽—《ほとんど何もない第一番》を中心に—」(2013)、ならびに先端芸術音楽創作学会第15回(2013)及び第19回研究会(2014)にて《第一番》研究報告を、第23回研究会(2015)にて《ほとんど何もないあるいは生きる欲望 第一部：コース・メジャン》研究報告を実施。

	作品名	形態	創作年
1	ほとんど何も無い第一番あるいは海岸の夜明け Presque rien no 1 ou Le lever du jour au bord de la mer	電子音響音楽	1967-70
2	二つのエピソードによる、ドキュメンタリー映画:ほとんど何も無いあるいは生きる欲望 Film Documentaire en deux épisodes: Presque rien ou le désir de vivre 第一部:コース・メジャン、第二部:ラルザック高原 Première partie: Le Causse Méjean. Deuxième partie: Le Plateau du Larzac.	ドキュメンタリー映画	1972-73
3	ほとんど何も無い第二番「こうして夜は私の多重頭脳の中で続いて行く」 Presque rien no 2. "Ainsi continue la nuit dans ma tête multiple"	電子音響音楽	1977
4	少女たちとほとんど何も無い Presque rien avec filles	電子音響音楽	1989
5	ほとんど何も無い第四番「村への登坂」 Presque rien no 4 - "La remontée du village"	電子音響音楽	1990-98
6	楽器とほとんど何も無い—概念の開拓5 Presque Rien avec Instruments -Exploitation des Concept 5	ミクスト作品(器楽とテープ)	2001
7	ほとんど何も無いの後に Après Presque Rien	ミクスト作品(器楽とテープ)	2004

参考: ジャクリヌ・コー「リュック・フェラーリとほとんど何も無い インタヴュー&リュック・フェラーリのテキストと想像上の自伝」  
椎名亮輔訳、東京:現代思潮新社、2006年  
Jacqueline Caux. *Presque rien avec Luc Ferrari*. Nice: Main d'œuvre, 2002.

表 1. 《ほとんど何も無い》作品群リスト

## 2.1. リュック・フェラーリ邸

2014年8月31日、2015年8月30日、フェラーリの自宅(モントルイユ)を訪問した。生前の作業場がそのまま残り、独特なインテリアで彩られた部屋に、作曲に使用したであろう白いピアノが花を添えていた。この部屋では「Vela Luka 1968」と題された冊子を発見した。ヴェラ・ルカとは旧ユーゴスラビア(現クロアチア)のコルチュラ島にある漁村の地名で、1967年あるいは68年にフェラーリ夫妻が友人に招かれて滞在した地である。この時に録音した環境音を素材として作曲したのが《第一番》であり、この楽曲についてフェラーリは「まったく音楽の音を用いずに一つの「作品」を作り上げるというラディカルな態度によって注目すべき」[2]と述べる。さて、そのヴェラ・ルカでは、1968年に芸術家の国際会議が初めて開催され、モザイク画の制作が行われた<sup>3</sup>。冊子はその報告書のようなのだが、刊行年や発行者など書誌に関しては未確認に留まる。この国際的な集まりにはフェラーリも居合わせたといい、多くの芸術家やモザイク画との接触が《第一番》創作に何らかの波紋を投じた可能性も皆無とはいえない。単独では些細な欠片に過ぎない細かな材料を大量に寄せ集めることで、一つの絵や模様を描くモザイク画の特徴に対し、録音物を繋ぎ合わせて漁港の夜明けという一連の情景を描き出した《第一番》の創作手法が、類似するとまでは言えないにせよ、ある種の親近感は覚えざるを得ない。ヴェラ・ルカでの経験が、《ほとんど何も無い》作品群の嚆矢となった《第一番》、

<sup>3</sup> ヴェラ・ルカ観光局公式サイト <http://www.tzvelaluka.hr/?lang=en&index=10> (2015年11月30日アクセス)

ひいては作品群そのものの起点となるという仮説は、現段階では茫然たる推測の域を過ぎないが、新たな見解として調査する価値はあるだろう。

## 2.2. アトリエ・ポスト=ピリッヒ Atelier post-billig

2014年9月1日、パリ市内に1996年に設立されたフェラーリのホーム・スタジオを訪問した。コンピュータやシンセサイザーなどの機材が揃い、壁面に設けられた棚にぎっしりと大量のテープ、DAT、CDなどのメディアが保管されていた。メディアは概して総数1000点を超えているように見えた。筆者は2013年の論文で、フェラーリの自筆草稿に基づく《第一番》の考察を行ったが、この草稿には、ヴェラ・ルカで環境音を録音したテープが8本あること、また、それぞれのテープに収録された音響の内容が事細かに記述されていた。草稿はフェラーリ夫人の協力を得て入手した未出版の資料であり、よって8本のテープの所在についてはこれまで言及されてこなかったが、このホーム・スタジオを確認した所、背表紙に《第一番》と記されたテープを確かに8本発見し、草稿の記述を裏付ける根拠となった。これらのテープには1968年と記されていた。この年号は、屈折せずに受け止めるならば、そのテープの内容が録音された年を示すと考えられるだろう。実は自筆草稿の表紙にも、1968年7月という表記があった。これまで、ヴェラ・ルカでの録音年については、2003年に制作されたドキュメンタリー映画[3]内におけるフェラーリの証言によると1967年とされ、しかし、その映画と同名の書籍に収録されたインタビューでは1968年と述べており、確証を得ることに困難を

きたしていた。さらに、作曲年は公式に1967-70年とされており、録音がいつ行われたのか真相はもはや闇の中であった。しかし、一次資料であるテープや自筆草稿の記述は信憑性が高く、録音年が1968年であると判断する大きな証左と捉えられる。この年フェラーリはパリの街中で5月革命の様子を録音していたという。社会の動乱を録音という手段でキャプチャーすることに意識的であったこの時期に、ヴェラ・ルカという異国の社会で録音を行ったという事実、また、作曲年との齟齬についても、引き続き検証していく必要がある。

### 2.3. GRM とラジオ・フランス

2014年9月2日、パリの両施設を訪れた。GRM(音楽研究グループ Groupe de Recherches Musicales)はフェラーリが1958-66年の間ピエール・シェフェール Pierre Schaeffer (1910-95)らと協働した組織である。元来、器楽作品の作曲を活動の礎としていたフェラーリが、ミュージック・コンクレートの創始者であるシェフェールの誘いを受けて参入し、シェフェールの実験に携わり、またピエール・アンリ Pierre Henry (1927-)の助手を務めたという経験は、《ほとんど何もない》作品群を含む、組織脱退後の創作活動の指針を決定付ける主要な因子の一つとなっている。そのGRMと、関連組織であるラジオ・フランスには、作曲家クリスチャン・エロワ氏の厚意により訪問が実現した。GRMの一部の部屋は機材移動の最中、またラジオ・フランスは至る所工事中であったが、様々なスタジオやスタッフの作業部屋を見学することができた。デジタルとアナログの機器が共存し、現在まで稼働している古い機材もあるという。GRMでは、複数の筆者によるフェラーリ作品解題などをまとめた文献の編著者であるエヴリン・ガイヨー氏から直々にその書籍[4]を戴くなど、予想外の収穫もあった。館内にはフェラーリのサウンド・アーカイブを用いた作曲コンペティション「プレスク・リヤン賞」のポスターが貼られ、スタッフの作業部屋にもフェラーリのポスターが飾られており、彼亡き現在に至ってもその残像が命脈を保っているように感じられた。フェラーリが在籍していた頃の話や、関わる機材、資料などを確認するまでには至らなかったが、組織の黎明期にまさにこの場所で、芸術音楽における先駆的な仕事に身を投じていたフェラーリの片影を垣間見たように感じ、《ほとんど何もない》作品群へ繋がる鍵を探すべく再訪を心に誓った。

### 2.4. 回路の詩神協会 La Muse en Circuit

2014年9月9日、アルフォールヴィルにある回路の詩神協会を訪れた。ここは芸術家を受け入れる為の

組織として、1982年にフェラーリによって立ち上げられた。その後1994年にこの組織のディレクターを辞任するが、辞任後も録音などの作業の為に当組織のスタジオを使用することがあったという。アトリエ・ポスト=ビリッヒが個人のホーム・スタジオであるのに対し、回路の詩神協会は専門的な機材を揃えたスタジオを有しており、それを活用していたようである。この組織は現在、芸術的支援、教育活動などを行う国立音楽創作センターとして運営されている。フェラーリが在籍していた頃のスタッフは既に退いており、案内して頂いた方はフェラーリと直に顔を合わせたこともなく、もはやこの組織は設立者フェラーリの活動の文脈とは断絶されているようにも見える。しかし、その看板には未だフェラーリの名が残り、さらにフェラーリの楽譜や資料の管理を請け負うという責務を担っている。音源資料なども含め、データとしてコンピュータにアーカイブされているようであった。その中から《ほとんど何もない》作品群に関連する未出版資料として、《楽器とほとんど何もない》演奏の録音<sup>4</sup>と上演に際してのテキストを事前にemailで受け取った。今後の作品分析の材料となるべく貴重な資料である。また、フェラーリの残した虚偽の「自伝」のコピーを戴いた。「自伝」は、略歴を詐称したり、空想の物語を綴る文章であり、椎名(2002)[5]に詳しい。《第一番》の発表年である1970年に「自伝 No.1」として書き始められ、また、「自伝 No.10」(1978)においては「ほとんど何もないは何ものでもないなんてことはない」[6]と綴っており、「自伝」と《ほとんど何もない》作品群との接点は検討の対象に値する。ここでは、1970年の「自伝 No.1」から1986年の「自伝 No.13」までを提供して頂いたが、コー著『リュック・フェラーリとほとんど何もない』には、その先の1997年「自伝 No.16」、年代が遡る1994年「自伝 No.18」が掲載されている。「自伝」がフェラーリの生涯においていつまで著されたのか、それらに何が描かれているのか、「自伝」の全貌については確認したい。

### 2.5. フュチュラ音楽祭 Festival Futura

2014、15年8月、フランス南東部に位置する町クレで開催された音楽祭に参加した。毎年夏、数日間に亘って開催されるアコースティック芸術の音楽祭であり、本年も50人を超える作曲家の作品が100以上のスピーカーを用いたアコースモニウムによって演奏された。2015年の音楽祭最終日である8月22日はちょうどフェラーリ没後10年の命日にあたり、オマージュ・コンサートとして《ほとんど何もない》電子音響音楽4作品全曲が演奏された。フェラーリが残した数多の電子音響音楽作品の中で、わざわざこの4曲が記念す

<sup>4</sup>2004年4月6日パリのシルヴィア・モンフォール劇場での演奏

べきコンサートのために選定された経緯には、複数の関係者の提案や意向があったという。背景として《ほとんど何もない》がフェラーリの代表作の一つであることを多くの関係者が共有していたことは明らかである。さらに、直前のコンサートはシェフェールと、シェフェールを唯一の師と仰ぐイヴォ・マレク Ivo Malec (1925-) の作品を特集したものであった。1958年シェフェール作曲のエチュードから始まったプログラムは、ミュージック・コンクレート円熟期の興隆を想起させる。フェラーリがシェフェールと袂を分かちその引き金となった電子音響音楽《異型接合体 Hétérozygote》(1963-64) に端を発する「逸話的音楽 *musique anecdotique*」<sup>5</sup> の部類に属した《ほとんど何もない》電子音響音楽4作品が、当のシェフェール作品に続くコンサートにプログラムされている、このコントラストは明らかに意図的である。フチュラのディレクターを務めるヴァンサン・ロブフ氏が企てたといい、《ほとんど何もない》とは対照的でありながらも、その源泉と言って差し支えないミュージック・コンクレートの典型であるシェフェール作品、またその志を受け継ぐマレク作品と隣り合わせることで、《ほとんど何もない》の特質を浮き彫りにし、その創意に対する敬慕を示したプログラム構成であったと解釈したい。シェフェールとマレク作品の演奏を行ったジョナタン・プラジェ氏は、演奏にあたってミュージック・コンクレートの歴史を追憶すると共に、この日がフェラーリの命日であることを語った。《ほとんど何もない》が軸となって、現代まで脈々と列なる歴史と、その始原であるシェフェール、歴史を独創的な流儀で展開させたフェラーリへの畏敬の念を実感する一夜であった。

### 3. おわりに

訪問調査を実施し、《ほとんど何もない》作品群を解釈する上での新しい見地を発掘することができた。フェラーリの自宅での冊子の発見により、ヴェラ・ルカでの芸術家やモザイク画との接触が《第一番》の創作に結び付くきっかけの一つであるという仮説を導くこととなった。また、アトリエ・ポスト＝ビリッヒでのテープの発見は、《第一番》自筆草稿の記述内容を担保する揺るぎない根拠となり、同時に《ほとんど何もない》作品群へ立ち向かうにあたっての突破口をこの草稿に見出すことへの期待も感じた。関係者からの資料提供や生の証言を引き出すことも叶い、作品群全体像へのアプローチとしての第一歩を踏み出すこととなった。しかし現時点では瞭然たる結論は何一つ提示出来ていない。今後は、収集した一次資料の解析、整理をより一層進めること、ならびに二次資料の調査、精読

<sup>5</sup> フェラーリの「逸話的音楽 *musique anecdotique*」について本稿では言及できなかったが、渡邊(2013)[7]、(2015)[8]に詳しい。

を進めること、そして重要なのは当然、探求の軸である作品分析をより深く慎重に重ねることが必要となる。具体的には、前述の冊子の書誌と内容を確認し、自筆草稿を更に詳細に解析することで、多くの研究者や音楽家が論じてきた《第一番》論を洗い直すことなどが挙げられる。また、当然《第一番》より先に歩を進めねばならず、課題は山積みであるが、今後も探求を継続する。

### 4. 参考文献

- [1] ジャクリーヌ・コー『リュック・フェラーリとほとんど何もない インタビュー&リュック・フェラーリのテキストと想像上の自伝』(Jacqueline Caux. *Presque rien avec Luc Ferrari*. Nice: Main d'œuvre, 2002.) 椎名亮輔 訳、東京：現代思潮新社、2006年、223頁
- [2] 同上、227頁
- [3] *Presque rien avec Luc Ferrari*. Jacqueline Caux and Olivier Pascal, director; ELICA: VPO-4290 (DVD). Recorded 2003, released 2008.
- [4] Évelyne Gayou. ed. *Portrait polychrome: Luc Ferrari*. Paris: Ina-GRM, 2001.
- [5] 椎名亮輔「リュック・フェラーリ、あるいは非<音楽>としての記憶」、『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第19巻、2002年、93-107頁
- [6] コー、224頁
- [7] 渡邊愛「逸話的音楽をめぐって—リュック・フェラーリ作曲《パリ—東京—パリ》を題材に—」、『東京藝術大学音楽文化学論集』第3号、65-75頁、2013年
- [8] 渡邊愛「リュック・フェラーリの電子音響作品における逸話の構造」、東京藝術大学大学院音楽研究科博士論文、2015年

### 5. 著者プロフィール

#### 佐藤亜矢子 (Ayako SATO)

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程在籍。主に電子音響音楽の作曲と研究を行う。FUTURA、WOCMAT、NYCEMF、SMC、ICMC、ISMIR等の国際学会や音楽祭で作品上演。CCMC2012 佳作、International Electroacoustic Music Young Composers Awards 2012 第三位、2013 佳作(台湾)、Destellos Competition 2013 佳作(アルゼンチン)、Prix Presque Rien 2013 第三位(フ

ランス)、東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞受賞。  
先端芸術音楽創作学会運営委員、日本電子音楽協会会  
員、ICMA 会員。